７２年目の８月　色あせぬ歴史の教訓

あの戦争のころ、世の中はどんな色をしていたのか。世界のすべてがモノクロームだったようなイメージがある。そう話す若者たちがいる。今年も８月１５日を迎えた。「不戦の誓いとか戦争体験の継承とか言われても、時代が違うのだから」。若い世代からそんな戸惑いが聞こえてくる。たしかに同じ歴史がくり返されることはない。

戦争の形も時代に応じて変わる。だが、その土台を支える社会のありように共通するものを見ることができる。そこに歴史の教訓がある。　【8 月 15 日　朝日新聞】

＊教訓［教えさとすこと。また、その内容や言葉］

小学校の修学旅行などで訪れた広島や長崎，沖縄にも、あの暑い日がやってきました。
君たちも再来年には、広島・長崎とはまた違う**“戦争”**を象徴する**沖縄**の土を踏みます。
72 年前の出来事を体験していない私たちですが、決して風化（記憶や印象が、月日とともに薄れていくこと）させてはいけないことです。

Q：沖縄と広島・長崎に　共通するもの　とは何でしょうか？

また、７２年前の　沖縄の教訓　とは何だと思いますか？

あなたの意見を聞かせてください。職員室前のロッカーの上に、**［７３投票箱］**　を置いていますので、たくさんの意見を待っています。締め切りは、３０日（水）午後４：００とします。

８月６日　**平和への誓い［抜粋］　　こども代表　広島市立小学校６年**

原子爆弾が投下される前の広島には、美しい自然がありました。
大好きな人の優しい笑顔、温もりがありました。一緒に創るはずだった未来がありました。広島には、当たり前の日常があったのです。1945 年、8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島の街は焼け野原となりました。広島の町を失ったのです。多くの命、多くの夢を、失ったのです。当時、小学生だった語り部の方は、「亡くなった母と姉を見ても涙が出なかった」と語ります。感情までも奪われた人がいたのです。大切なものを奪われ、心の中に深い傷を負った広島の人々。しかし今、広島は、人々の笑顔が自然にあふれる街になりました。草や木であふれ、緑いっぱいの街になりました。平和都市として、世界中の人に感心を持たれる街となりました。あのまま人々が諦めてしまっていたら、復興への強い思いや願いを捨てていたら、苦しい中、必死で生きてきた人々がいなければ、今の広島はありません。広島の子供の私たちが勇気を出し、心と心をつなぐ架け橋を築いていきます。

８月９日　**平和への誓い［抜粋］　　被爆者代表**

原爆が投下された 1945 年 8 月 9 日、私は 16 歳。11 時 2 分、白い閃光（せんこう）と爆発音を感じ慌てて机の下にもぐり込みました。夕方、帰宅命令が出て、私は学友と２人、山を越えて帰ろうと中腹まできたところ、山上から逃げてくる多くのけが人に「山の向こうは一面火の海だから…」と制止され、翌朝、電車の線路に沿って歩き始めました。駅舎は焼け落ち、見慣れた町並みは消えてなくなり、別世界に迷い込んだようでした。ようやくたどりついた親せきの家は倒壊していました。その中で家の梁（はり）を右腕に抱きかかえるような姿で 18 歳の姉は息絶えていました。あの時、私が無理をしてでも家に帰っていれば、せめて最期に声をかけられたのではないかと、今でも悔やまれてなりません。そのあと、さらに丘を越えると眼下に浦上天主堂が炎上していました。涙があふれ出るとともに怒りを覚え、「ああ、世界が終わる」と思いました。ここ平和公園の横を流れる川には折り重なって死体が浮いていました。私は、疎開していた両親に姉の死を報告し、8 月 12 日、母と弟と３人で、姉の遺体を茶毘（だび）に付しました。その日は晴天でした。頭上から真夏の太陽が照りつけ、顔の正面からは熱気と臭気がせまり目がくらみそうでした。母は少し離れた場所で地面を見つめたまま、ただ祈り続けていました。　＊茶毘（だび）に付す［死者を火葬にする］

たった一発の原子爆弾は７万４千人の尊い命を奪い、７万５千人を傷つけました。あの日、爆心地周辺から運よく逃げ延びた人々の中には、助かった喜びも束の間、えたいのしれない病魔に襲われ多くが帰らぬ人となりました。なんと恐ろしいことでしょう。私は 1979 年、原爆で生き残った有志６人で原爆写真の収集を始め、これまでに様々な人たちが撮影した４千枚を超える写真を収集検証してきました。原子雲の下で起きた真実を伝える写真の力を信じ、これからも被爆の実相を伝え、世界の恒久平和と核廃絶のために微力をつくすことを亡くなられた御霊の前に誓います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・キ リ ト リ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

共通するものとは	
沖縄の教訓とは	

（　　）組（　　）番　氏名（　　）